

『経験のための戦い』

——情報の生態学から社会哲学へ——

E. S. リード 新曜社・二九四〇円

西洋の哲学的伝統は、その始まりの頃——アテネの偉大な思想家たちの時代から、日常経験を単なる現象として軽視し、実在と現象との間には大きな隔たりがある」と力説してきたが、ガリレオが「自然という書物は数学の言語で書かれている」と語った十七世紀の「科学革命」やそれを受けたデカルト哲学を俟って、「真理」と日常経験の乖離は決定的となった。

そうした主潮流に抗った例外は、一次的経験を全ての意味の根源とみなし、デカルト

トの知覚理論を拒んだジョン・デューイ、他人の経験から学びたいという本物の欲求を持ち続け、語るためにも聴くためにも行脚を続けたウィリアム・モリスらを数えるばかりである。

デカルトは彼の科学によって現代世界を先取りしたが、それ以上に不確実性を恐怖したことで真に現代世界を先取りした。とリードは言う。確かに現在、分業化・オートメーション化された製造業やマニュアル化されたサービスマスの労働現場、そしてまた教育現場も、「不確実性」への恐怖に支配されている。

デューイやモリスの衣鉢を継ぐリードは、ジェームズ・ギブソンのアフォーダンス理論に依拠し、自力で見、触り、味わい、聞き、嗅ぐことができるものだけで構成される「一次的経験」こそあらゆる心的生活の基盤である、と説く。

生きていくということは、危険を享受し、間違えから学ぶことである。

間違える勇気が経験と希望を生み、その共有を可能にして社会を形成する。

リードの思想は、二次元のモニター画面を世界のすべてと錯覚しがちな現代人に、是非とも届けられるべきである。

(フ)